

さかでないことを、さいごに記しておきたい。

(京都國立博物館 神田喜一郎)

黄錫珪編 「李太白年譜附李太白編年詩目錄。」 北京作

家出版社 一九五八年二月 九六頁

詹鐸編著 「李白詩文繫年」

北京作家出版社 一九五八年六月 一九六頁

近來、人民中國における文學遺産への大がかりな研究と關係書物の出版は、わたしたちの讀書スピードをはるかにこえるほど多くなつてゐる。とくに昨年あたりからは、かすかすの論文評論集にまじつて、資料集や年譜の刊行が目立つようになつた。これは、多くの資料を發掘し、共同の研究材料として提出することによつて、より正確な資料に整理していかうとする長期計畫のあらわれとみてよいだろう。そんななかで、過去の詩人たちがどのように位置づけられていくかということ、わたしたちにも、いろいろな

關心をいだかせるが、ここにとりあげる二書は、とりわけ李白研究のあゆみに關係がある點で、意味のある出版といえよう。二書がともに、出版社と發行の年をおなじくするというだけでも讀者の注意をひくに充分であり、さらにこの二書が、李白研究ではつねに、もつとも難關とされる年譜と詩文の制作年次に關する資料であるということからも、それはいえる。

ちかごろ公刊された李白關係の書は、數種にのぼるが、ここにとりあげる二書のほかはいわゆる傳記や評論であつて、資料的興味をもつものはすくなかつた。(そのうちの二書・王瑤著「李白」林庚著「詩人李白」についてはすでに、中國文學報第四冊で、福永光司氏により書評がなされている。) この二書は、資料的興味をもつ「年譜」と「詩文の編年」をこころみたものである。しかし、それがあまりにもみごとにこなわれている點で、大へん驚異的だといわなければならぬ點をいくつかもつてゐる。

李白の詩については、いままでその制作の時と所について、ほとんどわからないままにおかれてきた。彼の一生を

通じて、作品の上での變化や進歩がいちじるしくないので、その面からの追及がむづかしいことにもよるだろうが、旅行のあとをたどるにしても、ほとんど推測の域にとどまるとしなければならぬからである。一般におこなわれてゐる王琦編輯の年譜も、推測の可能な範圍しかのべてはいない。

「李白は一體、どんな生活をとおして詩をかいたのか？ 職業は？ 家族は？」

そういう疑問にこたえる材料は、彼の詩をよくよみ、分析するほかにないということがすべての鍵であるらしいのだが、わたしたちがそれをすこしでもときたい希望をもつてゐるいま、その分析をこころみた書物が二種も出版されたのは、よろこびと同時におどろきをもあたえる。

黃錫珪編「李太白年譜」は、詩作とあまり關係のない十七歳まで、王琦の年譜とちがわないが、十七歳以後、六十歳の死亡の年まで、どの一年として空白がないまでに、李白の足跡を断定してゐる。しかしそれはかえつて不安を感じさせる。その論證のしかたにも、不安を感じさせる要

素がすくなくない。編者の黃錫珪は、清末（一八六二年）にうまれ、民國三十年（一九四一年）、八十歳の高齡で世を去つた人で、はやくから中國内外の各地を旅行してまわつたり、考古學や金石・書畫の研究がすきで、二萬冊にちかい藏書の持主でもあつたという。李白についての研究はとくに熱意をもつていたようであるが、この書に附録としてつけられてゐる「李太白編年詩集目錄」は、十年にわたる研究の結果であり、黃氏四十五歳のときの仕事である。ただし、遺稿としておおよけにされたこの書は、編年詩にもとづいてつくられた「年譜」が主となつていて、「李太白編年詩集目錄」には、考證のあとがなんにも記されていない。この附録によると黃氏は、李白の詩文のうち、「古風」と少數の詩をのぞいたほとんどについて、制作年月と場所をさだめてゐるが、考證の記録がないうえに、このように大膽であるためにいろいろな不安や疑問をのこすのは當然であらう。「年譜」は、その編年詩にもとづいてゐるため、くわしく李白の足跡をさだめてゐるが、春夏秋冬の別のこまかい断定まで、すぐそのままにはうけとれない。

例を、李白が蜀をでた年についてとつてみよう。論據は「年譜」のなかの黄氏の「案」にもとめるほかに材料はないが、黄氏は、開元十四年を李白の出蜀の年とする。王璿の年譜は、開元十三年・二十五歳の時とする。

開元十四年丙寅。太白・年二十六。この年ふたたび峨眉山に遊ぶ。秋間、すなわち蜀中より、納溪・渝州をへて三峽を出で、楚の地に來遊す、およそ江陵・武陵の各處を經。「案」白、開元九年かつて峨眉山に遊ぶ、「峨眉山に登る」の一詩にこれを見る。この年ふたたび峨眉山に遊ぶ、「峨眉山月の歌」の詩にいう：「峨眉山月半輪の月、影平羌江水に入つて流る。夜 清溪を發して三峽に向う、君を思えど見えず、渝州に下る。」この詩けだし、白の蜀中にありて、みちに、納溪縣の清溪をへ、その峨眉山の友人に寄するもの。これをもつて、白、この年ふたたび峨眉山に遊ぶを知る、而うして疑い無し。白に「蔡十一の還つて雲夢に家するを送る序」ありていう、「海草三たび緑なすも、國門に歸らず、また更に春に逢いて、ふたたび郷思むすばる。」

考うるにこの篇すなわち、開元十八年作る所、その出遊の時を逆數すれば、まさにこの年の秋間に在るべし。又、白に「門に車馬の客有り行」の詩ありて云う「嘆ず我が萬里の遊、飄飄三十春」「秋白鍊藥院にて白髮を鑷き、元六林宗に贈る」の詩に云う「分を投じて三十載、榮枯 歡ぶところを同じゅうす、」二詩すなわち至徳元載、太白年五十六の作る所。その出蜀の時を逆數するに、またこの年にありて疑いなるべし。：傍點をつけたように、黄氏の根據とするのは、三緑、三十春、三十載という數字である。「門有車馬客行」は、王琦も、安祿山の亂のあと、至徳元年五十六歳のときの作だとするが、この「三十春」がそのまま三十年の年月だといえるかどうかはうたがわしい。詩ではたとえ二十八年であつても三十年とする可能性があるので、前後の誤差五年はあるものとかんがえる方がむしろ常識であろう。さらに、開元十八年「海草三緑」の證明をもとめて「案」をみると、

開元十八年庚午。太白年三十。春 江夏に在り。後、方

城・汝海の各處に遊び、歳暮還た安陸に憩う。〔案〕

白に「早春江夏にて蔡十の還つて雲夢に家するを送る序」あり。「海草三たび緑なすも、國門に歸らず、又さらに春に逢いて、再び郷思むすばる」あり。考うるに太白、開元十四年秋間に蜀を出で、ここに至りて恰かも四年の久しきあり。……

としるされている。ここでは、開元十四年に蜀を出たことがさだまつたものとして「海草三緑」がつかわれているのである。これでは、互證になつても、客觀的な根據とはならない。このように客觀的判斷の根據をしめさずに、數字を實數とみたてて決定していくやり方は危険といわなければならぬ。それは、李白の詩における數字の虚構性をかんがえてみれば、わかることだが、たとえば次の、數字使用度數概算からだけでもいえることなのである。

*印をつけた一・三・五という數字は、他にくらべてよく使われる數字である。これらは實數であるほかに、他の數字とも組みあわせて使われることが多く、實數の概念とはちがつて、しめす數字の近似的な量をあらわす言葉として

數字 度數

*一……………	三六九+α
二……………	五五+α
*三……………	二三〇+α
四……………	九一+α
*五……………	一五四+α
六……………	四三+α
七……………	二七
八……………	三〇+α
九……………	八六+α
一〇……………	五〇+α

αはその項以外の場所で見られるもの、たとえば一のところ
↓衝○木、得○、守○……
と記されるものを指す。

(李白歌詩索引による)

も存在する。三緑・三十春・三十載、あるいはよくいわれる白髮三千丈も、その例にもれない。詩における數字の虚構性が、近代的な數の概念で計算できるものでないことは、いまさら説く必要もないであろう。黄氏の計算は、「但就『年譜』來說、已經比較薛仲邕原譜和王琦補訂薛譜、超過不少；而李詩的編年、尤爲創造性的勞働。」という出版説明のほめことばをもつてしても、かなりのゆきすぎと考えられる。また、すくなくとも四度の結婚をしたであろうといわれている李白の結婚について、黄氏は、その二つまでを

断定した。一つは、開元二十年・三十二歳のとき安陸において、もう一つは、天寶十一年、五十二歳のとき洛陽においてとし、この決定にも詩語中の數字の援用がおこなわれている。王琦の年譜でもある程度の目安として、數字をあげてはいるが、これほど安易に根據としない點で、黃氏の態度よりも慎重である。そのほか、黃氏が「太白之精靈呵護」によつて發見したという李白の文三篇を附録にのせているが、これは残念ながら李白の文ではなく、獨孤及のものである。黃氏の態度はその點でも嚴密を缺く。これについては、平岡武夫編「資料・李白の作品」唐代研究のし京都大學人文科學研究所一九五八年十月の序説にくわしくとかれてるので參考になるであろう。出版説明のおわりに、本書の二・三の例のあやまりをあげ「這也是小小的錯誤。因是遺稿、不便改動。」と結んでゐるが、これは親切とはいえない。あやまりとわかっているものには注意書をつけておくだけの配慮が必要である。

一方、詹鍇編著「李白詩文繫年」は、さきに出た「李白詩論叢」の姉妹篇で、序によれば、これも十四年前の仕事

だという。二書ともに戦後の仕事でないところもよく似ているが、ここでは、李白の全作品の約三分の二以上を編年する。黃氏の断定よりもすくないが、古風については半數以上をさだめ、大體として、王琦の年譜にそつてゐるようである。編年の場合や場所についても、黃氏のようにこまかくさだめないし、推定する年に、前後二・三年のふくみがあるとのべているなど、資料としては慎重であるといえよう。また、引用書も多く、獨斷をさけようとする努力が感じられる。それにしても、この年譜の詩の編年も、おどろくばかりに丹念であり、その丹念さをうらづける考證の敘述についてはやはりよわい。當然のことながら、この書と黃氏の書との編年はちがつており、個々の足どりのたり方にもずれがある。二書のさだめる作品の制作年代と場所は、さきにひいた「李白の作品」に並べて記録されているので、わたしたちには大へん便利な資料になつてゐる。

以上二書の長短をのべてきたが、では、二書のいずれをとるかという問題になると、わたしは、缺點を多くあげた黃氏の方を、むしろより多く採用する。それは次の理由か

らである。すなわち、わたしたち外國人にくらべて、すくなくとも自國の詩をよむ編者たちの方が、李詩についての讀みがよりふかいと感じられる點で二書は輕視できないこと。さらに、李詩そのものを材料として追求している點で、李詩によせる愛情のふかさのようなものの點で、「李白詩文繫年」よりも「李太白年譜」の方により特色があるということによる。數字の妙な援用や、非科學的な面があるにもかかわらず、黃氏の著はおもしろいのである。

しかしながら、やはり二書の仕事は創造的であり、有がたい前例である。これらを足がかりとして、さらに科學的な操作と、作品自體への讀みをふかめることにより、より完全な李白年譜と詩文編年をつくりあげていけるであらうし、またその意味でこそ、二書の出版は價值をもつといえるであらう。

(京都大學 島田久美子)

施子愉 「柳宗元年譜」

武漢湖北人民出版社 一九五八年七月 一二四頁

柳宗元の傳記は唐の文學者としてはよくわかる方である。それは詩文集四十五卷・外集二卷・補遺一卷という大量の著作が傳わつている事や、複雑となるべき後半生が、湖南の永州に十年、廣西の柳州に五年という變化の少ない流謫生活だつた事にもよるだろう。そのためかどうか、年譜はこれまで比較的簡單なものしか作られていない。その古いものとして宋の文安禮の「柳文年譜」(紹興五年八一三—三五)序)は、詩文の系年はかなり精しいが、その行事は要點しか記されていない。おなじく宋の張敦頤の「柳先生歷官紀」(乾道五年八一六—一九)序)はその缺を補うほどのものでもない。我國では、齋藤拙堂「柳柳州年譜」(「續文話」卷四・天保七年八一八—三六)、富山房編輯局編「唐宋八大家系圖竝年譜」(漢文大系「唐宋八家文上」附・明治四十三年八一九—一〇)、